

サレジオの技術教育史

工業学校1935-1947

工業高校1948-1965

工業高専1963-2019～

サレジオ高専校長 小島知博

創立者ヨハネ・ボスコ(聖人)



聖ヨハネ・ボスコ
(サレジオ会創立者)

旧制本館校舎



旧制印刷科実習



旧制裁縫科制作



旧制工業学校入学者



新制工業高校本館



工高木工科実習

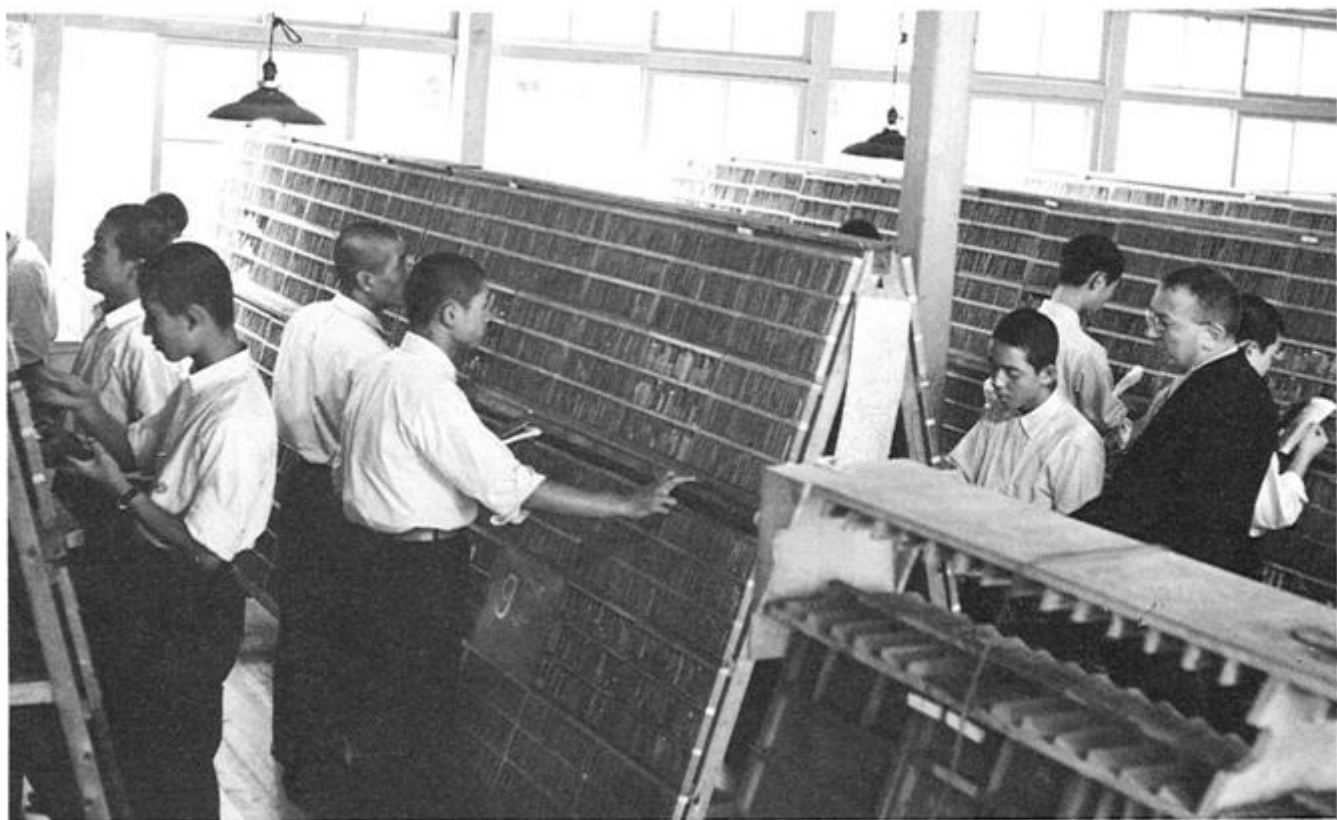


真鍮プレスによる接合指導—バッチ・先生

新制工高木工科



木材工芸科乾燥室（バジヨ先生）



1年生の活版実習(若き日のナジ先生)



石版実習指導—ナジ先生

電気科強電実験室にて―高久先生



新制工高電気科実習盤



変電室での電力実験（高久先生）

新制本館



新制工高印刷研究館



創立25周年寄稿



さらなる伝統と 特色の発揮を期待

前文部大臣
森 喜朗

このたび、学校法人育英学院が創立50周年を迎え、「育英創立50周年記念誌」を編纂されますことは、まことに慶賀に存じ、心からお祝いを申し上げます。

顧みますと、学校法人育英学院は昭和10年創立の東京育英工芸学校を前身とし、旧制工業高校、新制工業高校として30年、更に昭和38年からは育英工業高等専門学校を開設して20年の輝かしい歴史をもっております。

高等専門学校は、昭和37年度に新しい高等教育機関として発足しました。当時、我が国における科学技術の進歩に対応し、理論的な基礎の上に真に実践的な技術を身につけた第一線の技術者の養成が必要とされ、中学校卒業5ヵ年間の一貫した教育を施すことができる新たな学校制度として創設されたものです。

昭和37年12月に設置認可を受けた育英工業高等専門学校は、この趣旨により昭和38年度から印刷工学科2学級、電気工学科2学級、工業意匠学科1学級の3学科5学級で発足し、“神は愛なり、技術は人なり、真理は道なり”の校是の下、豊かな人間性とすぐれた技術を培うことを目標に、5年間の一貫した特色ある教育のもとで多大の成果をあげてされました。

この間、昭和42年には校名を育英工業高等専門学校と改称するとともに、工業意匠学科を工業デザイン学科に改め、また、昭和50年には印刷工学科をグラフィック工学科に改め、今日入学定員225名（総定員1,125名）を擁し、創設以来7,500余名にのぼる有為な卒業生を社会に送り出しております。今日、我が国をとりまく環境には厳しいものがあり、資源・エネルギー問題、人口の高齢化など、対処すべき多くの課題に直面しております。資源に乏しい我が国が将来にわたって発展を続け

創立25周年寄稿



わが国印刷業界に多大な貢献、
今後その役割はさらに重要に

日本印刷学会会長
プロセス機㈱社長

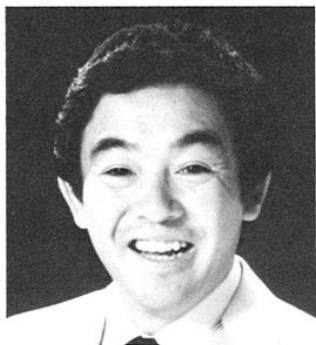
井上 英一

今般、貴育英工業高等専門学校におかれましては創立五十周年を迎えられ、ますます隆盛のことをうかがい日本印刷学会を代表して心から御慶び申し上げます。

周知のように明治時代にわが国の学校教育が創始されて以来、多数の教育機関が異なる分野に設置され、活発な人材養成が行われて参りました。しかしながら印刷界における印刷技術者の教育機関は数少なく、社会の要望に応えるに至っておりません。その中で、貴校は創立以来、印刷界のために優秀な幹部技術者を育成され、極めて多大な貢献をされております。貴校がわが国において高い評価と尊敬を受けておられることはまことに自然のことと思います。これはひとえに貴校の指導者、教職員、卒業生、ならびに関係各位の皆様の卓越した教育の理念に基づいた熱心な御努力によるものであり、深く敬意を表するものであります。

現在の印刷技術は基礎工学ならびに関連する情報処理技術の著しい進歩に伴って急速な変革を遂げつつあります。したがって、これに携る技術者の質及び量の一層の向上および強化が強く望まれていることは言うまでもありません。しかしながら、技術者の教育は単に技術の習得だけではなく、技術を正しい判断に基づいて駆使する人間性の涵養を伴わなければならないことはいうまでもありません。これこそ貴校創立以来の教育理念に合致するところではないかと拝察申し上げます。このことを思いますと貴校のわが国印刷産業界に対する役割は極めて重要であり、社会の期待もまたことに大なるものがあります。

創立25周年寄稿



目的を定めた育英教育の素晴らしさ。
卒院生の誇りを後輩に語ろう。

俳優
高橋 元太郎（育英中学卒業生）

育英学院創立50周年。育英工業高専創立20周年。心よりお祝を申し上げます。

私は昭和31年度帝都育英学院中学校の卒業です。

当時高校には電気科、木工科、印刷科、がありその頃としては最高の設備であったと記憶しております。

その高校が産業界の進展に即応する為、高専として誕生し20周年を迎えたと聞くと時の移り変わりの早さを感じられます。

現在いわれている様に目的を持たない若者が多い中、育英高専に入学する生徒諸君は少なくとも中学卒業時に於て自分の将来の希望と目標をしっかりと持った若者達であると信じます。諸君らも育英高専の生徒である事に誇りを持ち目標に向かって進んで欲しいと思います。教育に関しても戦後から始まった教育方針の見直しが問題になっているおり、専門学校として5年間専門知識を学び学友と共に過ごすという事は技術修得、人間形成に於ても君達の素晴らしい財産となる事でしょう。

学校関係者、生徒諸君互いに力を合せ日本、世界に誇る工業高専を築き21世紀に向って多数の有為の人材の育成に努められる様希望し育英工業高専の隆昌と発展をお祈り申し上げます。

工高から育英高専へ



高専初期グラフィック工学科

グラフィック工学科 学科史

一真真牛

グラフィック工学科の学科史は、垣生真一と三浦澄雄が担当した。垣生は主として開設から昭和53年頃まで、三浦は主として昭和53年以降を執筆した。文中、本校の教員については敬称を略し、2度目からは姓のみとした。

開設当時からの概況

昭和38年、育英高専開設時は教授陣も建物・設備も未整備の状態であった。予定リストには印刷業界の著名技術者が名を連ねたが、現実には1期生が高専1年生なので、専門教科の講義時間も少なく、多数の教員はまだ不要であった。印刷工学科科長1、ナジの他、

専任教授は青木信利(大蔵省印刷局から)、工業高校の兼務として榎本降司、朝倉満、サレジオ会員の教員はR. ソコール、O. コジオ、北西敏、森正義、星野忠昌、その他、高専スタッフ予定者としての高校非常勤講師の小島実弘(デザイン)、垣生真一(写真製版)らが在職した。

印刷館は3階建てで、昭和38年夏から4階の増築工事が始まり、2・3年生の教室の真上で在来のコンクリートへの打ち込み音がけたたましく響いた。昭和39年に完成して新1年生の一般教室として使用され、現在のような研究室と広い合同教室に模様替えたのは昭和40年9月になってからで、研究室(現印刷物理・製版化学)の設計は池田正雄先生(立教大学)が担当した。

昭和41年同研究室使用開始時、印刷物理実験室の恒温恒湿の許容範囲を $\pm 1^{\circ}\text{C}$ 、 $\pm 5\%$ にすることになり(当初予定は $+3^{\circ}\text{C}$ 、 $+10\%$)思いがけない出費増になった。

高校時代は活版組版室であった2階は平版製版室になり、1階の印刷室にはオフセット印刷機が並べられイメージが一変した(図1)。

育英工業高校は、業界サイドからは、J. ナジを中心とする活版中心の学校で、地味な校風と見られ、必ず

図1 印刷工学科校舎配置図(昭和41年11月現在)



しも有名な学校ではなかった。その学校が新しい学利である工業専攻になり、同時に写真製版および、平版製版部門を拡張し、また高等教育機関、研究機関としてデパートメントを面に出すことはニュースであった。当時、印刷に関する高等教育機関は、千葉大学工学部印刷工学科、東京写真製版大印刷科の2校のみで、これに新たに育英高専印刷工学科が加わるというので、業界および学界では、大い期待がもたれていた。

本校に就職する時、履歴書の報文数を尋ねられ、「研究業績をあげて欲しい」と言われたことから、研究的活動が重視されたようである。

高専になった当時は、多くの印刷業界人が見学に来



高専初期電気工学科

電気工学科史

高田英一・石川日出夫・仁村光延・松岡宏

■電気工学科のあゆみ

本校は昭和8年11月、日本サレジオ修道会により、職業教育を目的として創設された東京育英工芸学校を前身とする。その後幾多の変遷を経て昭和23年3月、帝都育英工業高等学校となり翌24年4月、電気科が新設された。戦後の日本国内における産業基盤の復興期に電気科が新設された意義は大きい。電気科校舎は緑につつまれた1万坪のキャンパスの中に独立して位置し、当時としては異例の20kV高圧圧発生装置、各種電気機械、電子機器、測定器などが設置され、昭和38年3月までの14年間中等技術教育の場として多くの有能な人材を養成して来た。一方、昭和34年頃より日本の産業界は高度経済成長を示し、産業界より中等技術者養成の必要性が叫ばれた。この要請に答えて現在の高等専門学校教育が発足したのである。「高等専門学校は、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。」とうたわれた教育目標は本校教育の目指す目標でもあり、本校もこの要請に応え昭和38年4月、育英高等専門学校として新発足したのである。当学科も同年4月、高久熊男を学科長とし、前身の工業高等学校電気科を引き継ぎ、育英高等専門学校電気工学科として新発足したのである。

高専発足に当たっては、その教育理念、教育課程の概要は「高等専門学校教育課程の標準試案」(文部省大学学術局発行)に示されたものを参考に高専教育5ヵ年間の教育大綱を定め、教育内容、設備等、細部については学年進行に伴い充実させていくことを申し合わせ、全教員一致協力し、高専としての新たな教育活動の第一歩を踏み出したのである。

発足当時の高専に対する社会の期待度が高く、本校電気工学科においても、昭和38年4月、第1期入学者として118名を迎え入れたのである。

入学者の多くが新発足した教育制度のもとで理論と技術を学び身につけ、自分の能力を高めたいという積

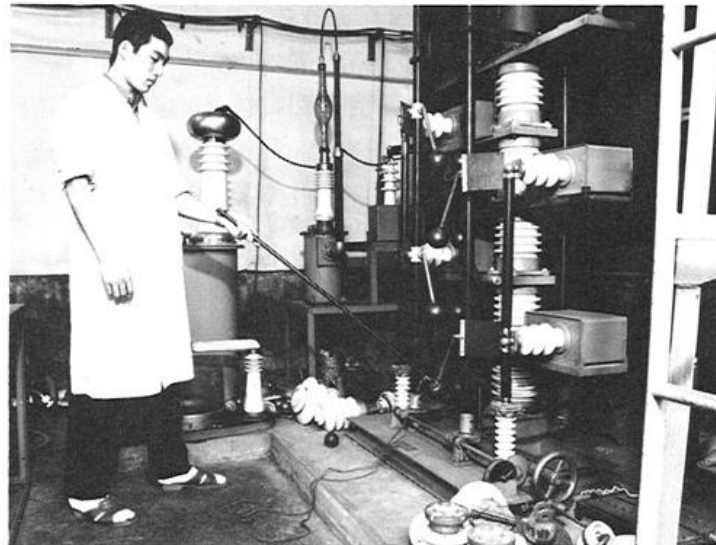
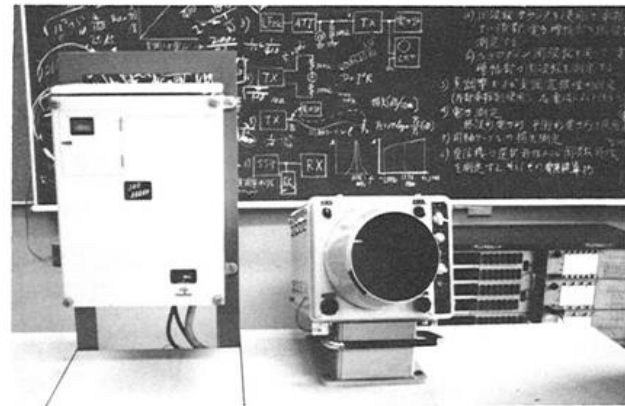
極的な姿勢の者が多く、施設、設備とも不十分な教育環境のもとでよく努力をした。

第1期入学者に対する初年度教育は、一般教育27単位時間、専門科目8単位時間、特別教育活動1単位時間、計36単位時間が実施された。

施設は前身である工業高等学校当時のものを受け継いだものであり、拡充の必要性が多分に残されていた。設備面においても同様な状態であり、高専発足を期し導入された数々の機器はあったものの、充分な状態とはほど遠いものであった。当時の電気機械実験室には従来より使用されてきた年季の入った電動機、発電機等に加え、新たに導入された電動機、発電機、実験用セット、各種計測用計器等が配置され、また、通信工学実験室には、旧型SSB送信機、レーダーをはじめ実験用測定装置(オシロスコープ、発振器、パルソル、アッテネータ、電源等を一組としたセット)12基が新設されていた。また、これら実験室、一般教室を含む校舎も旧校舎1棟のみであり、教室不足のため電気製図等は他学科に間借りし、電気工作実習については、寒風の中、中庭で実施したなど、苦勞の多い出発であった。以後、学年進行に伴い、施設・設備も充分とはいえないまでも徐々に整備され、昭和42年の完成年度においては待望の校舎増築もあり、ほぼ一通りの体制をつくることが出来た。またこの年、電気事業法の規定に基づく電気事業取扱主任技術者資格認定(第2種)を産商産業者に申請し、第1期入学者にさかのぼり適用の認可を受けることが出来た。

また、発足当初よりの電気工学科教育方針として、第1学年から第3学年までの3年間にしっかりと基礎教育を行い、これに基づき4学年以降の専門課程においては、本人の能力・適性を考慮し、更に専門性を高める意味で、「電力コース」、「電子・通信コース」の2コース制を敷き学生はこの何れかのコースを選択する制度を実施してきた。この制度は現在も実施されており、特に今日の技術革新の早い時代においてはなくてはならない有用な制度の一つになっている。

高専は5ヵ年間の教育課程を有する完全教育の場であり、当然卒業予定者のほとんどが就職を希望することになる。社会の、特に産業界の強い要請によって設立された学校制度であったとはいえ、初の卒業生を送



高専初期工業デザイン学科

工業デザイン学科史

岩本竹郎・景山 勲・小西 均

(1) まえがき

工業デザイン学科の発祥は、その源を東京育英工業学校（旧制甲種工業高校）の木材工業科に遡る。

昭和38年、産業界の強い要望による中堅技術者の養成に应运で設けられた高専制度が本校にも導入されたことにより、育英工業高等専門学校工業意匠学科が発足した。

新設当時、工業意匠学科は大学においても類例がなく、高専では本校が唯一であったが、一般的にも、その言葉は十分に理解されていない社会状況であった。

教育目的や内容の具体案は学科長に就任したフランソワ・ヘンドリックスを中心に設定され、その基本理念は今日まで一貫しているが、カリキュラムは社会の変化に応じてその内容を新たにしている。

当時の教育目的と理念は次の如く示されている。

(目的) 日進月歩の発展をつづける近代産業の根源ともいふべき創作力、表現技術に関する形態構成の知識と造形色彩の技術教育を授け、制作意欲の旺盛な中堅技術者を養成すること。

(理念) 1、デザイン教育は学生に自信を浸透させなければならぬ。

2、指導者はデザインする上の火付け役であって、単なる監督者であってはならない。

3、デザイン教育は理性の発育はもちろん、豊かな情操の発育をはかる総合教育でなくてはならない。

4、デザイン教育は学校内の教育に止まるものではなく社会との関連を持った教育とすべきである。

5、デザイン教育は学生が積極的に仕事に参加し、助け合う事と仕事を通して決断力の養成を計らなくてはならない。

(I KUEI DESIGN No. 1より)

昭和42年に工業デザイン学科と改称されて、翌43年

には第1回卒業生として45名が大手企業に全員就職した。

本校のユニークなカリキュラムによるインダストリアルデザイナーの養成は斯界から注目され、加えて昭和43年（1968年）3月、東京大手町の都立産業会館で開催された第1回卒業生の卒業制作展は多大な反響を呼んで、華々しいスタートを切った。なお、この卒業制作展は工業デザイン学科学生の保護者による贈金と教職員、学生の努力によるもので、昭和48年まで同所で開催された。

なお、当時の工業デザイン学科のスタッフはヘンドリックス主任教授のほか、トウス、スロイテル、能谷岩本(朝)、鈴木、佐藤、景山、中沢、朝岡、長谷川、加藤(昌)、岩本(竹)、住田、市川、フランドレ、大内、等(順不同)であった。

さらにこの年には研究生制度を設け、卒業生数名に対して高度なデザイン力と豊かな美的センスを身につけるための特別な授業も編成されたが、2年後にはそれぞれが就職して後続しなかった。

第一回、2回卒業生の就職先は、日立、東芝、松下電器、ソニーなど（順不同）の家電メーカーを初め、日産、トヨタ、いすゞ、マツダ、富士重工など（順不同）の自動車メーカーのほか富士通、日本電気、沖電気、安立電気など（順不同）の専門機器メーカー、山田照明、ヤマギワ、キャノン、日本コロムビア、日経アルミ、積水化学、ミサワホーム、吉野工業など（順不同）のほか、家具、木工関係の幅広い範囲におよび、その後の卒業生の先例となって今日に至っている。

又、就職先と関係なく各自が5年間の成果として研究制作した卒業研究は、いわゆる「日紅から機関車まで」と言われる工業デザインの分野にわたり、特に昭和47年度卒業生の作品の一部は民放テレビの「小川宏ショー」で紹介されて好評を博した。第1回卒業生以降現在に至る卒業生の作品集は貴重な資料となっている。

これらの卒業制作は工業デザイン学科の工房で制作されているが、高専以前の施設設備に加えて逐次整備されて、木材、金属、プラスチック製品の制作、加工の実習に成果をおさめている。これら工房の施設設備のほかに写真真製作機、複写機、印刷機、コンビ



昭和50年、学校長にヘンドリックス前主任教授が就任した。従来他科では研究室制度にもとづくカリキュラムが編成されていたが、本学科でもこれに準ずべきことが指示され、下記の名称と編成がきめられた。

第一(プロダクト)研究室 岩本、朝岡、深川、中沢

第二(システム)研究室 ヘンドリックス・バジ

ョ、景山、長谷川、小西

なお、プロダクト実習とゼミナールは4、5年の合同授業として実施された。

高専電気工学科新館



マイコン実習(高専電気)



パソコン実習(高専電気)



大型印刷機実習(高専印刷)



デザイン実習（高専デザイン）



最新鋭輪転印刷機(高専印刷)



デザイン工房実習（高専デザイン）



高専行事(ロボコン)



ソーラチャレンジ(課外活動)



杉並校舎とお別れ



町田に移転（サレジオ高専）



新キャンパス(町田開校)



ソーラーチャレンジ



DreamCup 鈴鹿 2009+



WSC 2007+

夢工房（ロボコン・ソーラー）

